



カンボジア伝統の絹織物を復興させた

森本喜久男さん

旅先の博物館でみたその布には命が宿っていた。布の生命力に引き寄せられ、復活に奔走して10年経つ。優美な衣装と光沢ある豊かな色彩で知られるカンボジアの緞かすり。

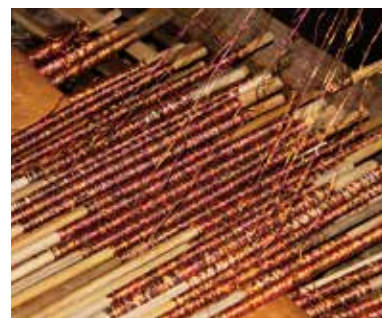


た高齢の織り手を探し出した。その技能を若者が懸命に学ぶ。研修中も全員有給、子連れ可。織った布には作り手の名を添える。「もっといい物を作りたい、という気持ちを支えるのが、僕の仕事」と心得る。

伝統の絹織物は、国民に黒衣を強制したポル・ポト政権とその後の戦乱で途絶えていた。



京都の手描き友禅職人だったが、タイ、カンボジアに見せられて移り住んだ。アンコール遺跡群近くに設立した「クメール伝統織物研究所」の代表として、日本のテレビ局の撮影を手伝って得る収入も注ぎ込み、「自転車操業」を続ける。今は約500人が働く。桑を植え蚕を育て、染料になる虫や樹木を



取り戻す森づくりも始まった。

ユネスコ委託の調査で村々を回り、埋もれてい

い、という気持ちを支えるのが、僕の仕事」と心得る。

スイスの時計メーカーが76年に創設した「傑出した企画を遂行する個人」に贈られるロレックス賞を日本人として初めて受けた。

織りを実演する観光施設に、働き手10人ほどが高給で引き抜かれたこともある。



だが、中核の50人は誘いを断った。「本物を作るこの仕事が好き、と言ってもらえた」と笑顔を見せた。



文：鶴見知子